

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 6 号

平成 2 2 年 8 月 5 日
鳥取県病虫害防除所

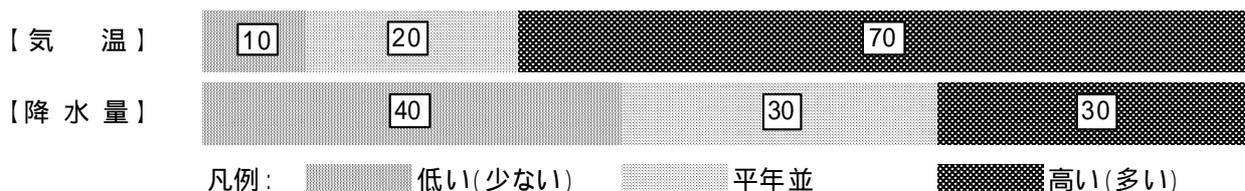
予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(穂いもち)	平年並	やや少ない
		紋枯病	-	平年並
		ニカメイガ	平年並	やや少ない
		セジロウンカ	-	やや多い
		トビイロウンカ	-	平年並
		斑点米カメムシ類	-	多い
		コブノメイガ	平年並	平年並
	フタオビコヤガ	-	やや多い	
	ダイズ	紫斑病	平年並	平年並
		ハスモンヨトウ	平年並	平年並
カメムシ類		平年並	やや多い	
果樹	ナシ	黒斑病	-	平年並
		ハダニ類	-	平年並~やや多い
		シンクイムシ類	平年並	やや多い
	カキ	うどんこ病	平年並	やや多い
		炭疽病	平年並	平年並
		カキノヘタムシガ	やや遅い	やや多い
共通	カメムシ類	平年並	多い	
野菜	ネギ	軟腐病	やや早い	やや多い
		白絹病	やや早い	やや多い
		黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	平年並	やや多い
		ネギアザミウマ	平年並	やや多い
		シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い
		ナガイモ	炭疽病	平年並
	ナガイモコガ		平年並	やや多い
	ハダニ類		平年並	やや多い
	シロイチモジヨトウ		平年並	やや多い
	シバ	スジキリヨトウ	平年並	やや多い
		シバツトガ	平年並	やや多い
	キャベツ・ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)		平年並	やや多い	

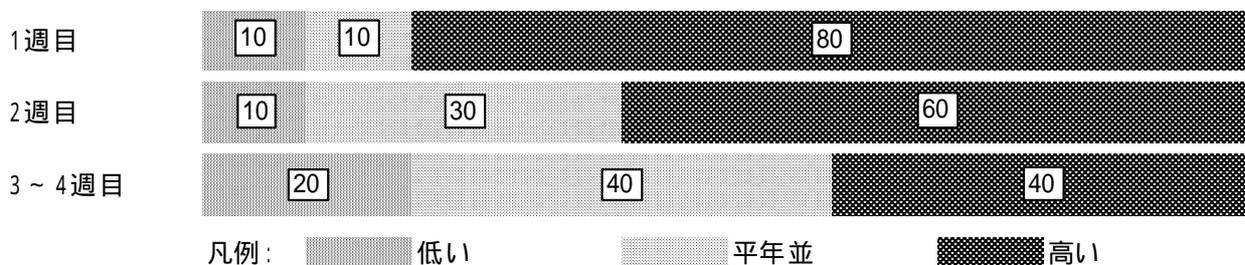
気象予報 (抜粋)

1 か月予報 (7 月 3 1 日 ~ 8 月 3 0 日 : 7 月 3 0 日、広島地方気象台発表)
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。
平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
週別の気温は、1 週目は高い確率 8 0 %、2 週目は高い確率 6 0 %、3 ~ 4 週目は平年並または高い確率ともに 4 0 % です。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



普通作物

[イネ]

1 いもち病(穂いもち)

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 7月30日現在、葉いもちの発生ほ場率は28.0%(平年:31.7%)で平年並である。
- イ 梅雨明け以降、概ね好天で経過していることから、葉いもちの多発生地域は一部の中間地～山間地に限られている。
- ウ イネの出穂期は平年並と予想されていることから、穂いもちの発生時期は平年並と見込まれる。
- エ 向こう1か月の気象予報によると、晴れの日が多いと予想されており、本病の発生はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 穂いもち防除は予防防除を基本とする。なお、中間地～山間地の葉いもちの発生の多い地域では、穂いもちの多発生が懸念されるので、防除を徹底する。
- イ 粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃期に散布する。
- ウ 出穂していない中生品種などで粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して水面施用する(湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める)。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地ほ場における本病の発生は、平年に比べてやや少ない。
- イ 8月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、平年に比べて気温が高いと予想されており、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 出穂期頃までに防除を行う。なお、コシヒカリの防除の目安は、穂ばらみ期の発病株率が18%程度とする。
- イ 病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、病害虫防除指針などを参考にして追加防除を行う。

3 ニカメイガ（第2世代）

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯及びフェロモントラップにおける総誘殺数は平年に比べてやや少ない。
- イ 7月下旬現在、現地ほ場における第1世代幼虫の発生は平年に比べてやや少ない。
- ウ 第1世代幼虫の発育はほぼ平年並である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、8月上旬に心枯茎率1.5%以上又は被害株率10%以上の場合、8月中旬（第2世代幼虫の発生最盛期）に防除を行う。
- イ 近年、一部の地域では発生が増加傾向にあるので、ほ場の発生動向に注意する。

4 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域（特に平坦部）
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯への総誘殺数は平年に比べてやや多い。
- イ 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年に比べてやや多い。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生に好適な条件になると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- 8月上旬の要防除水準は、成幼虫数10頭/株である。要防除水準を超えているほ場は、病害虫防除指針などを参考にして、粉剤などを使用して直ちに防除を行う。

5 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域	平坦部（特に沿岸部）
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。
- イ 7月下旬現在、巡回調査定点などの現地ほ場では、沿岸部の一部のほ場で発生が確認されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在、本種を対象とした防除は必要ないと予想される。しかし、ほ場間差が大きいため、各ほ場における生息密度に注意し、今後の病虫害発生予察情報を参考にする。
- イ 8月中旬頃の要防除水準は、成幼虫数1頭/株である。要防除水準を超えているほ場は、病虫害防除指針などを参考にして、粉剤などを使用して防除を行う。

6 斑点米カメムシ類(平成22年7月21日付、病虫害発生予察注意報第5号発表)

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月中旬現在、巡回調査定点の水田畦畔及び水田周辺のイネ科雑草地におけるカメムシ類の発生は多かった。
- イ 向こう1か月の気象予報から、水田におけるカメムシ類の加害活動及び増殖に好適な条件になると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

病虫害発生予察注意報第5号を参照。

7 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地ほ場における発生は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が多いほ場では、幼虫発生初期(8月第2~3半旬頃)に、病虫害防除指針などを参考にして、粉剤などを散布する。なお、粒剤で防除する場合は、発蛾最盛期(8月上旬頃)に散布を行う。

8 フタオビコヤガ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域(特に中間地~山間地)
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地ほ場における発生は、平年に比べてやや多かった。
- イ 7月下旬現在のほ場における本種の発育ステージ及び向こう1か月の気象予報から、本種の加害活動に好適な条件になると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア これから出穂を迎える早生品種栽培ほ場では、穂ばらみ期防除を徹底する。この時期は穂いもち及び紋枯病などの防除時期となるので、フタオビコヤガにも登録のある殺虫殺菌混合粉剤などによる同時防除を行う。
- イ 既に出穂しているほ場で穂ばらみ期防除を行っていない場合は、穂揃い期に防除を行う。この時期は斑点米カメムシ類及び穂いもちの防除時期となるので、フタオビコヤガにも登録のある粉剤などによる同時防除を行う。

ウ 中生品種等、8月中旬以降に出穂するほ場では、本種の発生状況を調査し、要防除水準（暫定版：下記の～の条件をすべて満たす場合、発生が1.2cm以上の幼虫、被害株率90%以上、食害葉面積率10～20%以上）を超えた場合は、直ちに防除を行う。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の開花期は平年並となっている。

イ 向こう3か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる6月第5半旬～7月第5半旬までの総誘殺数は平年並であった。

イ これまでの気象経過から、若齢幼虫による被害は、平年並の8月第2半旬以降に発生し始めると予想される。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並の発生になると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために、表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺（葉ごとの切除）あるいは粉剤などのスポット散布が有効である。

イ 幼虫が老齢になると薬剤の効果が十分得られないため、早期発見と早期防除に努める。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数は平年並である。

イ 大豆の開花期は平年並となっている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本種の加害活動及び増殖に好適な条件になると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後と、その10日後に、粉剤などを使用して防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月中旬に巡回調査を行った果実の除袋調査の結果によると、県内の平均発病率は、3.7%(平年:4.4%)、新梢葉の平均発病率は3.4%(平年:3.6%)でほぼ平年並であった。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、8月上旬にアリエッティC水和剤800倍液、8月中～下旬にアミスター10フロアブル1,500倍液又はストロビードライフロアブル3,000倍液を散布する。

2 ハダニ類(カンザワハダニ,クワオオハダニ,ナミハダニ)

(1) 予報の内容

発生量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬現在、ハダニ類の発生量は、全般的に平年並となっている。

イ 一部では、クワオオハダニ及びナミハダニを中心に密度が高く、葉焼け症状が観察されるほ場も認められている。

ウ 7月下旬現在、県予察ほ場におけるクワオオハダニの10葉当たりの雌成虫数は、0.0頭(平年:0.3頭)で平年並の発生密度である。

エ 向こう1か月の気象予報から、ハダニ類の増殖に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ クワオオハダニにはダニゲッターフロアブル2,000倍液などを、カンザワハダニ及びナミハダニには前述の剤に加えてマイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。

3 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は例年よりやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3世代成虫(第4回成虫)は、平年並の8月中下旬頃から増加すると予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 薬剤はアグロスリン水和剤2,000倍液などを使用する。

ウ 裸果(受粉樹に残っている果実など)はシンクイムシ類の発生源となるので、早急に除去する。

[カキ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液、8月下旬にストロビードライフロアブル3,000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地のカキ園(富有)での発病は、ほぼ平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 8月上旬にスコア顆粒水和剤3,000倍液、8月下旬にストロビードライフロアブル3,000倍液などを散布する。

イ 現在、発病の認められている新梢及び果実は、見つけ次第取り除く。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場の予察灯におけるカキノヘタムシガ第1回成虫の総誘殺数はやや多かった。また、7月第6半旬現在、第2回成虫の誘殺は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、第2回成虫の発生最盛期は平年よりやや遅い8月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

8月上旬にスミチオン水和剤40の1，200倍液などを散布する。多発園では8月中旬頃にアグロスリン水和剤2，000倍液などを追加散布する。

[共通 (ナシ、カキ、リンゴ)]

1 カメムシ類 (平成22年8月5日付、病害虫発生予察警報第1号発表)

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	多い

(2) 予報の根拠

平成22年度病害虫発生予察警報第1号 (平成22年8月5日発表) を参照。

(3) 防除上注意すべき事項

平成22年度病害虫発生予察警報第1号 (平成22年8月5日発表) を参照。

野 菜

[ネギ]

1 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギが傷つくような無理な土寄せ及び追肥などの作業で発病が助長されるので注意する。

イ 最終土寄せ前にナレート水和剤1，000倍液を散布する。土寄せ後にコサイドDF1，000倍液又はZボルドー500倍液を7～10日間隔で2～3回散布する。

2 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

8月に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2，000倍液を株元に散布する。

3 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並であるが、一部やや多いほ場も見受けられる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、粒剤ではベストガード粒剤6kg/10a株元処理、ダントツ粒剤6kg/10a株元散布、散布剤ではアグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤(アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤)400倍液0.4L/m²の株元灌注も有効である。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並であるが、一部で多発ほ場も見受けられる。

イ 県内全般に、被害のやや多いほ場が散見される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続きやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、粒剤ではダントツ粒剤6kg/10a株元散布、散布剤ではアドマイヤーフロアブル2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、ハチハチ乳剤1000倍液、ランネート45DF1,000倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤(アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤)400倍液0.4L/m²の株元灌注も有効である。

イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 現地ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は、5月下旬～6月上旬にやや多く推移したが、7月下旬現在は平年並となっている。

イ 現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、アタプロン乳剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 8月上旬現在、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 8月の薬剤防除には、ダコニール1000の1,000倍液(ムカゴにも登録あり)、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを予防散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数はやや多い。

イ 現地調査ほ場における幼虫の発生量は平年並～やや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続きやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は、高温乾燥条件及び風通しの悪いほ場で被害が増加するため、早期発見に努める。

イ 防除薬剤は、アタプロン乳剤2000倍液(ムカゴにも登録あり)、トレボン乳剤1,000倍液(ムカゴにも登録あり)などを7～10日間隔で2回程度散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多い予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生が増加する。薬剤防除は、茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので丁寧に散布する。
イ 防除薬剤は、コテツフロアブル2,000倍液(ムカゴにも登録あり)、コロマイト乳剤1,000倍液(ムカゴにも登録あり)などを使用する。

4 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。
イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除適期は若齢幼虫時で、この時期を逃すと防除困難となる。防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを使用する。

[シバ]

1 スジキリヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における、若齢幼虫による白化葉及び卵塊数は平年並である。
イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 卵のふ化直後の8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6～9kg又はオルトラン粒剤の10a当たり10kgを散布する。
イ その後も幼虫の発生がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

2 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における若齢幼虫の被害は平年並である。
イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月上～中旬に、ダイアジノン粒剤5の10a当たり6～9kg又はオルトラン粒剤の10a当たり10kgを散布する。
- イ その後も幼虫の発生がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40又はカルホス乳剤の1,000倍液などを散布する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 夏期の高温乾燥条件で多発しやすい。また、中齢幼虫以降は薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期の防除を徹底する。
- イ キャベツの防除薬剤は、トルネードフロアブル2,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液などを散布する。
- ウ ブロッコリーの防除薬剤は、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

2 ハイマダラノメイガ(ダイコンシンクイムシ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における幼虫の発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本虫は高温少雨、残暑の厳しい年に多発生し、内部の未展開葉や生長点部が食害されるので注意する。
- イ 育苗施設では、防虫寒冷紗被覆(網目1.5mm以下が好ましい)を実施し、害虫の侵入を防ぐ。
- ウ キャベツの防除薬剤は、発生初期にBT剤(エスマルクDFの1,000倍液など)、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを散布する。
- エ ブロッコリーの防除薬剤は、発生初期にBT剤(チューンアップ顆粒水和剤2,000倍液)、プリンスフロアブル2,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果(野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所
〒680-1142 鳥取市橋本 260
TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-0723
E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、8月26日(木)の予定です。